

ペン俳句会 句(第三七八号)

令和八年二月五日(木)

兼題『節分』、席題は「坊」。

句会を、以前の俳句会と同じ場所で開催。投句八名。出席七名。(欠席は良知さん、ゆふきさん、金魚姫さん)

松田 一文字

節分や児らの投げつけ鬼は外

御所の上(え)にたなびく雲や春立つ日

幼な児の道着きりりと寒稽古

薄氷のしたや緋鯉の動かざる

明けの陽にきらめきわたる霜の原

宿坊の淡き灯りや春の宵

宮原 凧

朝陽浴び風のやはらぎ春めけり

冬ざれや更地に残る欠け茶碗

短日や結末急ぐミステリ

朝いちの白湯のひと時春近し

節分の鬼に泣き出す利カン坊

節分や懐紙に包む五色豆

中村 晃也

吹き抜けの社殿や着膨れの宮司

雪虫を掴まんとして風掴む

大寒や滝行あとのキムチ鍋

豆撒きや坊主の付けし鬼の面

言霊の彷徨ふ冬の樹海かな

地吹雪の去るや気が付く肩の凝り

浜口 金魚姫

容赦なく豆を投げつけ鬼泣かす

胡麻あたる老いの手愛しほうれん草

節分や寿司かぶりつく子を笑わせて

試合負け坊主頭や春を待つ

ほうれん草の力漲る離乳食

節分や身の内に棲む鬼千匹

長尾 進一郎

校庭に子の遊ぶ声日脚伸び

春寒や水面湯気立つ多摩の川

雪を帯び姿を正す富士の嶺

チユリツブひと花をつけ孤独なり

春風に背中を押され野辺の道

水温み池の魚たち元氣付く

大津 そうかい

向ひ風坊主頭の受験生

凍つる夜の廊下の妻の気配かな

節分や主なき部屋へ福は内

蒼天のあを蠟梅を染むるなし

大寒の風荒れすさぶ別れかな

ずわい蟹味はひ尽し海怒濤

安藤 晃二

ひらぎの香節分の宵包みけり

節分や染物工場小川染め

始まりし夕の追儺の男声

節分や金柑のなほ盛りたる

宿坊に雀の来る厠かな

とりどりの梅の香匂ひ夕日差し

西川 知世

節分の夜の音深し屋根重ね

生国を離れて久し冬すみれ

手袋の小さきイニシャル通夜帰り

人逝けり春の雲の端空に溶け

梅蕾む丘の低きに墓を抱き

坊守の白き衣干し春待つ木

次回は令和八年三月五日(木)。兼題は「雛祭」(松田一文字さん出題)。席題は西川知世さん出題の「台」。

季語を学ぶ 初学にかえつて

西川 知世

二月の兼題は「雛祭」。季語の項目は行事の項「雛」の傍題である。ちよつと難しい言葉が並ぶが…三月三日に桃の花・白酒・菱餅・あられその他を雛に供えて祝うのは、上巳の日の祓の行事に、贖物

(あがもの)としての雛が集合したものだそう。
全て紙雛の立雛で、祓の舟に乗せ、陰陽師の祓の後
にことごとく水に流したそう。三月の限った遊び
ではなかったらしく、上巳の節句を雛祭と定め
たのは、後土御門天皇のみ代からで、江戸時代に、
人日・端午・七夕・重陽と並んで、五節句の一つ
となり、大奥で流行り、民間に広まっていくそう。
今ではデパートの催事であるかのような流行りの
行事であるが、その分、現代に密着した雛祭の句
が生まれてきて新しい句意が加わっていくのも面
白い。

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家	芭蕉
綿とりてねびまさりけり雛の顔	其角
とぼし灯の用意や雛の台所	千代女
立雛の面輪匂ひて眉目あり	水原秋櫻子
雛飾る暇はあれど移るべく	中村汀女
雛の軸睫毛向けあひ妻子睡る	中村草田男
雛の夜の燭にむかしのあるごとく	長谷川素十
夜半の雛肋剖きても吾死なじ	石田波郷
碧空に山するどくて雛祭	飯田龍太
手に軽く桜木匂ふ吉野雛	近本雪枝
土雛の急ぼしの紐のゆるやかに	橋本鶏二
引き止めて雛の灯ともし頃となる	水田むつみ